

# 児童文学今昔

— 児童観・児童像の変遷について —

## 関 英 雄

昨夏、県立神奈川近代文学館の主催で、鈴木三重吉没後五十周年記念の『赤い鳥』展が一カ月余にわたって同館で開催された。日本の近代児童文学の歴史が雑誌『赤い鳥』に始まることは歴史の事実で、この展覧会の実行委員の一人を依頼された私は『赤い鳥』の作家画家の作品の主なものを読返し見返して、その歴史の重味を改めて思ったことである。

『赤い鳥』創刊の大正七年は、日本で初めて自由・民主の思想の波が高まった大正デモクラシーの時期であり、封建遺制の残る近代日本で、子どもには大人と異なる子ども独自の精神生活の領域がある、という

「子どもの発見」（それは子どもの人権への自覚でもあった。）がなされた時代である。この認識から三重吉は新しい童話・童謡の創作をめざす雑誌『赤い鳥』（大正七）と昭和四。第二次・昭和六（十一）を出発させたが、子どもの発見は日本では当時の作家・詩人たちによる「童心」の発見としてとらえられた。『赤い鳥』を始め、後続の『金の星』『童話』など当時の童話童謡雑誌に拠る北原白秋、西条八十、野口雨情らの創作童謡、小川未明、千葉省三、雑誌『良友』に拠った浜田広介らの創作童話に

代表される「童心主義文学」の潮流は大正後半の新児童文学の主潮となった。

「童心主義」の本来は子どもの発見に即した子どもの内面の自由解放の思想である。北原白秋はエッセー「童謡私観」（大正十二）の中で「童謡は童心童謡の歌謡である。」と定義している。これが子どもの立場に立って子どもの喜びや哀しみを外に向かつて解放する歌の意であることは、「お祭」「子供の村」など子どもの集団的エネルギーを明るく昂揚したりリズムで謳った白秋童謡を見ればわかる。「赤い蠟燭と人魚」などの童話で知られる小川未明は、エッセー「子供は虐待に黙従す」（大正十五）で、子どもの人権無視の大人の社会を怒り、無力な子どもの代弁者として童話を書くと言った。千葉省三の出世作童話「虎ちゃんの日記」（大正十四）は、子どもの内がわからぬ農村の精彩ある子ども群像を描き、生きた子どもの典型を生み出した。

日本近代児童文学の成果を示す童心主義文学の代表的作品は今に読み継がれてきているが、「童心主義」の語は現代では多く否定的に使われている。それが一理あるのは、童心（主義）文学は童心讚美のあまり「大人の世界は色と欲の濁った世界であり、子

どもの純真素朴な魂こそ大人の心のふるさとである。大人は子どもに還れ」という、童心至上主義に陥入り、子どもこそ大人の父」とする倒錯した児童観に短期間のうちに墮ちて行ったからである。むろん童心派の作家詩人たちがみなそうだったということではない。子どもを社会から隔離することの童心主義亜流の児童観は、昭和初期に抬頭したプロレタリア児童文学の理論に打破された。児童文学の「子どもは天使」とする児童観を批判して、貧富の対立する社会で子どもは大人と共存しており、親の貧困はただちに子どもに影響する、子どもは天使では居られないと主張し、社会主義的児童観を唱えたプロレタリア児童文学も、作品は政治主義的偏向によってあまり稀ならず、弾圧によって短期間に姿を消した。

日中戦争から太平洋戦争に至る時代は、権力によって社会主義も自由主義も禁圧され、「児童」の語は人類主義的であるとして、国の子を強調する「少国民」の語に変えられた。児童文学は「少国民文学」と呼ばれた。皇国史観によって楠正行などが少年の理想像とされた。「欲しがりません勝

つまでは」という流布した標語が示すように、子どもの子どものらしい心情は否定され、子どもは封建時代の武士の子同様、戦力の単位としての「小さい大人」扱ひされた。そういう児童観に基く戦争讃美の詩や物語がいわゆる「少国民文学」の中身の大半だった。そこに文学の総りはなかった。

戦後の自由な児童文学は童話と小説に多くの総りを生んだが、例をあげれば松谷みよ子「ちいさいモモちゃん」(昭和三九)の幼女像、長崎源之助の長編「向こう横町のおいなりさん」(昭和五〇)の自然発生的な遊びのエネルギーの中でとらえられた子ども群像、また大石真の童話に描かれる健康な夢みる子たちの像は、「子どもの発見」以来の児童文学のプラス面を継承している。また、山中恒の長編「赤毛のポチ」(昭和三五)の炭坑長屋の闘う少女像始め、社会派リアリズムの流れに立つ作家たちの描く子ども像は、プロレタリア児童文学の「親の貧困を子どもも背負う」社会的存在としての児童像を発展的に受け継いできた。

けれどもここ十年ほどの高度経済成長以後の社会の変化を背景に、児童文学作品に

はこれまでにない新たな児童像が登場するようになった。情報化社会になってテレビその他で子どもが大人と情報を共有するようになり、日常の会話を始め、子どもらしからぬ「小さな大人」的言動をする子どもたちは、すでにここ十年近くの児童文学に多く登場してきている。が、それらは多く擬似大人で、彼らの大人っぽさはその表層部分にすぎない。原のぶこの長編「冬の歌」(昭和五九)の、サラ金苦にあえぐ破産家庭の母を助ける小学六年の少女主人公が大人びているのは、生活が彼女を大人にしたといえるが、森忠明の短編集「少年時代の画集」(佳作・昭和六〇)は小学六年の「おれ」「ぼく」という一人称の少年主人公の中に育ちつつある「大人の目」を描いている。物語を紹介する紙数がないが、彼はその目で親でも教師でも識別して批判し、大人と対等に生きて行こうとする。児童文学以来の子どもの子どもらしさはここにはない。この「大人子ども」が現代の先端的児童像なのかどうかは、今しばらく時の推移を見なければならぬだろう。

(一九八七・一月)